

報告4：楊 小平（広島大学外国人客員研究員）

近代中国における戦争の記憶の〈語り〉に関する一研究
—南京から広島へ そしてヒロシマからナンキンへ—

近代中国において、日中戦争の記憶は、国家の歴史や日中の政治関係などに反映されるだけでなく、当事者の記憶にも照射しながら、国民の社会生活にも影響を及ぼす。本研究は、南京において戦争経験を持つ「幸存者」の体験の語りを取り上げ、戦争の記憶の〈語り〉を分析することで、日中戦争は、近代中国における記憶の在り方を検討したい。さらに、広島における被爆者の被爆体験の語りと照らしながら、戦争の記憶の語りそして継承の在り方を検討する。

1937年12月13日に、南京市が日本軍によって占領され、多くの南京市民の犠牲を出す「南京大虐殺」の始まりとなった。その暴力から幸いに生き残った人々は、「幸存者」と呼ばれる。1980年代後半から、南京大虐殺の当事者に対する聞き取り調査が行い始め、幸存者はその被害の経験を公的な場で証言するようになった。1945年8月6日、広島に原爆を投下されたことに対して、1953年の原爆死没者慰霊碑の建入、1955年の広島平和記念資料館が開館され、原爆体験が公的な場において展示され、表象するようになった一方、1970年代後半より、被爆者団体及び被爆者個人の被爆証言が盛んになりつつあり、広島市や市民団体は被爆者証言の記録も積極的に取り込んできた。さらに、1985年に南京市では「江東門記念館」が開館され、南京の死没者の遺骨が展示され、2007年に「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館」に進化して、「南京大虐殺」の記憶の保存と表象が完成した。さらに、2014年に、同記念館での慰霊祭が「国家公祭日」と変身し、都市の記憶が国家の記憶に上昇する。こうした公的な記憶の変動には、日本における1980年代の教科書問題と連動しているだけでなく、広島における原爆体験の記念・記憶の儀式性も参考にされている。このような歴史的・社会的文脈において、南京の幸存者はその経験をどう語るのかを考察することは、国境と政治を越える記憶の越境を検討することに繋がり、その可能性を検証できる。